2つの世界

八神　はやて

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
２つの世界

【Ｎコード】
Ｎ７９４６Ｗ

【作者名】
八神　はやて

【あらすじ】
人間だれしも秘密がある。知られたくない事実がある。それをずっと隠し続ける蓮田（はすだ）　雷（らい）の一つの世界。そして、学校で何があったのか・・・・

思い出（プロローグ）

プロローグ

今日は新しい子がきたらしい。ま、僕には関係ないけど。おかげで、周りに誰もいない机に一人で座る。自己紹介が終わる。もちろん僕は聞かない。聞いてって何もならいから、聞かない。聞いたふりをするだけ。はっきり言って僕はここに来てからずっと、一人だった。最初はさみしかった。だけど、もう慣れた。なのに、その慣れを破壊するかのような声をさっきから聞いてる。

「ねぇねぇ、遊ぼうよ」

「・・・・」

「遊ぼうよ」

「・・・・」

コイツは今日来たばかりの子。だからと言って、僕によらなくてもいいのに。

「遊ぼうよ」

「・・・・」

おいおい、誰かコイツを助けてやれよ。なんて考えは甘すぎた。

「遊ばないんだったら、」

お、諦めたか。たすか・・・

「嫌でも遊ぶっ！」

ってなかった。神様は残酷すぎる。いくらなんでもこれはひどすぎる。

「なんで僕と遊びたがるの？」

とりあえず理由（わけ）を聞こう

「さびしそうだから」

「それが理由？」

「うん。だから、遊びましょ！」

「・・・あ」
気がつけば手を掴まれていた。
「ちょっ！手を離せっ！」
「離したら逃げるじゃない！」
「チッ！・・・もうわかったよ。遊ぶよ。で、名前はなんて言うの？」
その時に振り返った顔は二度と忘れることがなかった。そして、その日以降遊ぶことはなかった。

ピピピピピピッ！

目覚ましの音。
「・・・・眠い・・・・」
と言いつつも起き上る少年。起き上れば、男と思えないほどの長い髪。左目も前髪で隠れていた。
「はぁ、今日から学校か」
今日から2学期。そして、ちゃんと宿題をすませた。それにしても、懐かしい夢を見たなー。
「・・・・着替えないと」
部屋の隅にある箪笥までのろのろした動きで歩いて行く。中には制服。それを見て、
「畳のにおいがついてないといいんだけど」
顔を服に近づけて匂ってみるもわからない。そもそも、畳の部屋で畳のにおいがついてるかどうかなんて調べようがない。
「・・・無理だよな。それより、早く飯食べなきゃ」
部屋から出ると畳のにおいが消えた。その代わり朝食のにおいがかすかに漂ってる。
「・・・・平屋のくせに広すぎる」
俺の先祖がこの地域を納めてたらしいからこんなに大きいみたいだけど、広すぎる。

「はぁ」
ため息。それで、部屋の歩く距離が短くなればいいのに。
「しょうがない、するしかないよな」
一歩踏み出せば目の前にテーブルがあった。テーブルの上には朝飯が・・・
「いちいち、力を使うなっ！」

ゴンッ！

「いたっ！兄ちゃん、殴るなよ！」
俺の兄貴。蓮田（はすだ）　湊（しん）。スポーツ好きのような名前を持ちながら体育の成績は最悪、だけど勉強はできる。そんな人。そして、朝飯を食べていた。
「朝から元気じゃのう」
「おはよう、じいちゃん」
この人は俺のじいちゃん。蓮田（はすだ）　幻（げん）。俺の師匠。師匠の説明はまたあとでするさ。ちなみに、俺は蓮田（はすだ）　雷（らい）。・・・それにしても、俺って誰に向かってしゃべってるんだ?、と思いつつも、朝飯を食べる。学校がある日のいつもの朝だ。いつもの朝。もし、未来が見えたのなら俺は今すぐにでも学校に行かなかったのに。

思い出（プロローグ）（後書き）

プロローグだけで終わらせました。初投稿です。それにしても、gd gdですいませんです。「あらすじ」なんて適当に書いたものですので、本文と違うのです！！！感想とかよろしくです。　これから、こんな感じで「1章」「2章」・・・という感じで投稿して行こうと思います！うん、全然思いつかなかったからじゃないんだからねっ！こっちの方が書きやすいだけなんだからっ！・・・ツンデレっぽくしたって何も変わらないのでここで終わらさせていただきます。それでは、次回をおたのしみください・・・次回はいつになるのやら；；；；

読んでいただきありがとうございました

1章ー1　今と過去

1

学校に来て友達と会った。友達に会うのは良い。だって、久し振りに会うんだから。そして修行式も終り、教室に戻った。

「このくそ熱いのに元気だなぁ、お前ら」

担任が入ってきた。なんだか、うれしそうだった。

「起立っ！」

女子の声が聞こえた。まぁ、普通立つよな。礼くらいしないとだめだし。だけど、

「あ、挨拶やらなくていいや。面倒くさいし」

この教師はだめだった。面倒事は無視いていく性質（たち）らしい。めんどくさ。

「えーっと、このクラスに転入生来ました」

そして、すぐこの言葉だ。

「入っていいぞー」

担任が廊下に声をかけた。ドアが開けられて入ってきたのは・・・ふわっとしたツインテールでとてもかわいい女の子だった。

「愛宕（あたご）　楓夏（ふうか）です。よろしくお願いします」

へ？愛宕（あたご）？マジで？なんてこった。夢の続きかここは？顔に出さないようにずっと考えた。

「えーっと、このクラス、席自由だからあいてる所に座って」

あろうことか、このクラスの担任の性格を忘れてた。この人は、面倒くさがり屋なのだ。たとえ、休みの人のところに座ろうが気にしない。他の先生もあきらめてる。そして、俺の後ろは偶然にも・・

・休みだった・・・・。楓夏が俺の横を通った時に、
「また、一人なんだ」
ボソッと言った・・・気がした。
「うしっ、今日は愛宕さんに質問する時間を与えよう」
・・・ダメ教師じゃないか。その上、俺の後ろに座ってる。つまり、
「ねぇねぇ、どこから来たの？」
暑い！人口密度がひどすぎるっ！
[あ、あのっ、質問放課後にしませんか？その方が時間もある・・・からいいなぁ、なんて・・・]
どんどん声が小さくなっていってる。・・・助かったー。まぁ、暇だし寝るか。どうせ見る夢は今朝の夢の続きだった。

「ねぇ、らいちゃん。何して遊ぶ？」
「なんでもいいよ」
「んじゃ、おままごとっ！」
「やめてくれ・・・」
僕は今まで一度もこの子の名前を呼んだことがなかった。そうやって、時間が過ぎていく。一度も名前を呼ばずに。だけど、ある日のことだった。
「楓夏ちゃんが引っ越すことになりました」その言葉を聞いて、僕は思った。ほれ見ろ、僕にかかわるからだ。周りの反応は薄い。当たり前だ。町の嫌われ者と友達になろうなんて考えたからに決まってる。そう思いたかった。その日、楽しくなかった。苦しかった。寂しかった。今までに感じたことのない感情に・・・
「・・いちゃん、らいちゃん？」
体が揺れてる。違う、ゆすられてたのか。目を開けるとぼやけていた。・・・涙？
「どうしたの、らいちゃん？怖い夢でも見た？」

「そんなんで泣きやしない」
「ねぇ、何して遊ぶ？」
「は？」
「ねぇ、なにして遊ぶ？」
「・・・」
無視することにした。それに、気がつけば昼を過ぎてるし。
「ねぇ、らいちゃん」
「どうしたの？なんで私を避けるの？」
「・・・・」
困ったなぁ。変に答えると、墓穴掘りかえしそうだし、・・・うん、ここは無視をしようじゃないか。
「避けてない」
「じゃあ、なんで私と会話しないの？」
「今、会話してる」
「全然、楽しくないよ」
「俺はお前を楽しませないと駄目なのか？」
「うん」
おもいっきり笑顔で答えられた。家族以外の人と話すなんてなぁ。それに、面白い話なんてないし。・・・帰るか。
「らいちゃん、帰るの？だったら、私も帰る」
「・・・」
もしかしたら、毎日こんな感じで過ごさないと駄目なのか？そうだとしたら、どうしよう？鞄に荷物を詰め込みながら考えてた。
「明日・・・嫌な予感しかないな」
つぶやいた。
「どうしたの？」
「・・・なんでもない」
次の日、嫌な予感と言うものは的中した。朝起きたら、家にあいつがいた。

「朝からかよっ！」

いつもの自分じゃない声が出た。

1章ー1　今と過去（後書き）

こんな感じでいいのか？不安だ・・・。サブタイトルも不安だ・・・。同時ようもなく不安だ。不安だだらけだあああああああああああああ／（。ロ／）（／ロ。）／

1章―2

確かに、嫌な予感はしてたさ。でも、朝からはないだろう、普通。
「あ、らいちゃん、おはよう」
「・・・おはよ」
「雷、ちょうどいいところに」
じいちゃんが話しかけてきた。・・・たいてい、こういうときって嫌なことを押しつけられるんだよな・・・
「町を案内してやってくれ」
「・・・じいちゃんが行けば？」
「わしは、わしなりの用事があるからな」
「・・・・・にいちゃーん」
俺は、仕方なく暇そうに見える兄ちゃんを呼んだ。呼んだ、ただそれだけで、

「あほかっ！」

膝をけられた。いわゆる、「ひざかっくん」の逆をくらった。もちろん、声が上げれるわけがない。
「ッーーーー！！！！！！」
「・・・雷、行ってくれんかのう？」
やばい。これは、やばい。また、反論すれば・・・やられるっ！
「・・・・はい」
泣きそうな顔で返事をした。ちなみに、朝食は外でしろ、と学校は休みだ、のことだった。まぁ、こうなったら行くしかないよね。と言うわけで、町に来たもののあの時とあまり変わっていないから案内するところもないしなぁ、なんて思ってみたけど、俺に言ったこの言葉が気になって仕方がなかった。

「自分の気持ちに正直になったらどうじゃ？」

意味わかんねえー。それにしても、こいつはこいつでとても楽しそうだし。どうしよ・・・・・・

「ねぇ、らいちゃん」

「なに？」

「あの木、まだある？」

「あ、ああ。それなら、あの山の上だけど」

「じゃ、行こっ！」

「はいはい」

あの木・・・この町のシンボルみたいなものなんだけど、ちょっとした噂があったりするんだよね。まぁ、よくあるあれだ。あの木の下で告白したものは必ず恋人になれる。みたいな感じの噂がね。

「その前に、朝飯食べたいんだけど」

「それだったら、あそこの喫茶店にしよっ！」

「はいはい」

指差した先の喫茶店、学校帰りに生徒よく立ち寄る場所、つまり、俺の顔を知ってる奴がいるわけで・・・

「しくった・・・」

入店早々、後悔した。なんせ、俺の連れは今、町で有名の女の子だからだ。そこに、俺がいると・・・まぁ、喧嘩売ってくるよね。

「はぁ、よく考えて行動しなくちゃ」

「ん？どうしたの？」

「いや、なんでもない」

「ふーん。それよりさ、早くあそこに行かない？」

「まてまて、朝飯食べさせろよ」

「えー」

「なんで！？おかしいよ、その反応は！」

「私、あそこに行けたらいいもん」
「なるほど、俺はどうでもいいとな？」
「うん」
「・・・」
あれ、なんか涙が・・・
「らいちゃん、ごめんごめん。冗談よ」
泣いてることに気がついたのか謝ってくれた。うん、それでも心についた傷は消えないよね・・・
なんて、考えてるうちに注文した料理だ運ばれてきた。
「ねぇ、らいちゃん」
「ん？」
「私の名前・・・一回だけ呼んだこと覚えてる？」
「は？」
「あー、その反応ってことは忘れちゃってるね」
「名前呼んだっけ？」
「まぁ、幼稚園の頃だから忘れても当然なんだけどね」
「ふーん」
そんなことしてうちに何かを思いだしそうになる。うーん、なんだろうか・・・気になる。それに、すぐに思いだしそうな感覚なんだよな。
「でも、普通印象に残るはずなんだけどなぁ～」
「ん？」
「い、いやなんでもないよ」
何か聞こえたんだけどな・・・
「それより、早く食べちゃってよ」
「あ、ああ。そうだな」
微妙な返事をし、朝食を食べる。・・・早くしないと、怒られ・・・
「！？」

もう、止めて・・・足蹴らないで・・・

さっきから、ずっと足を蹴られて痛いから・・・・脛を蹴らないでほしいよ。

あれから少し時間が経ちまして、喫茶店での朝食を済ませ、これから木のところに行く林道を歩いてる。

「うわ～、全然変わってなーい」

「当たり前だろ」

「ねぇ、らいちゃん」

「ん？」

「あの木までどれくらいかかるかな？」

「うーん・・・３０分くらいじゃない？」

「そう」

「急にどうしたの？」

「まだ、思い出せないの？」

「・・・喫茶店で言ってたこと？」

「うん」

「・・・・・・何にも思い出せないや」

「そう・・・」

「ごめんな・・・」

「い、いいわよ、謝らなくて・・・」

「そうっか・・・」

「・・・・・」

「・・・・」

無言、無言。話がもたねぇー！はぁ。しっかし、こいつが何を思いださせようとしてるのか見当もつかない・・・

「えーっと、らいちゃん」

「ん？」

「あ、あのね・・・その、なんと言うかさ」

「？？？」
「何が起こっても動揺しないでね」
頬を染めて言ってた。何が起こっても・・・何する気だよ・・・
「・・・・何するか分からないけど、危ないことはするなよ」
「うん！」

笑顔でうなずいた、その顔を見た瞬間何かが頭の中に引っかかった。・・・なんだ、今の感じ・・・今のどこかで、見たことがあるような・・・・
「どうかしたの？」
「い、いや、なんでもない」
なんだ、今の感じ。何かを一瞬思い出したような・・・
「ねぇ、何か話すことないの？」
「何かって？」
「え・・・今まで元気だったとか？向こうはどうだったとかさ」
「元気かどうだかは今見たらわかること。向こうの事なんか知ったて今の俺には関係ない」
「そうやって、人から離れていくんだね。まるで、この世界の人じゃないみたい」
「そうだよ、俺はこの世界の住人じゃないんだよ」
「・・・・・・・・・」
少し、時間が止まった。俺は、今頃になって気づいたけど隠すべきことばらしてないか？
「・・・かわいそうな子を見つめる目を止めてくれない？」
そして、その空気を破るのも俺だった。と言うより、あの言葉から急にかわいそうな子を見る目になったんだけどっ！
「あ、ごめん。でも、今のいくらなんでも痛い子すぎるかな？」

「・・・・・・」
なんか心にザクッ！ってくるよ。と、まぁ、こんな感じでグダグダ登ってるとお目当ての木が見えてきた。うーん、それよりさっきからつけてる奴らどうしようか・・・
「はぁ、やっとついたぁ～！」
伸びをして横になるのを見て、少し笑ってしまった。
「あ、今笑った？」
「笑ってない」
「いーや、笑った！」
「笑ってないってばっ！」
ここで、正直に言ったら何かが壊れる気がするから否定し続けるうちに、ものすごく近くなっていた。
「・・・・・」
「・・・・・」
なんか、偶然こいつも気づいたようなんだけど・・・。いやいや、偶然過ぎるだろっ！
「あ、あのさ、ら、らいちゃん」
「な、なに？」
気まずい、ものすごい気まずいんですけど！
「あ、あのさ」
「う、うん、だか・・・」
顔を近づけてきた。と言うより、目を閉じて・・・・これって、まさか・・・
「！？」
き、キス・・・
「ご、ごめんね、らいちゃん。でも、言ったでしょ？何がっても動揺し、しないって・・・」
ええええええっ！なに、なにがあった！？それでも、俺の苦悩も

知らずに話し続ける。
「また、改めて言うわ。私は、らいちゃんの事が大好きです。それと、私にまた、き、キスさせたんだから、私の言うこと一つだけききなさいよっ！」
「い、いや、これはお前が勝手にしてきたのでありまして・・・」
・・・思いだしたぞ。昔、ここに来てこいつにき、キスされて、その時に告白されて名前を一回呼んでって言われたから一回だけ呼んだ。そして数日後、こいつは引っ越した。
「も、もしかして、一つ言うこと聞くってまさか・・・」
「ら、らいちゃん、思いだすの遅すぎるよ。でも、お察しの通り、これからずっと私このことを『ふうちゃん』って呼ぶこと」
頬を染めて言った。その姿があまりにかわいかったかもしれないけど、
「・・・わかった」
納得しちまったぁ・・・
「やったっ！これからよろしくね、らいちゃん」
「あ、ああ、よろしく、ふう、ちゃん」
あああああああああ、俺ががんばって築き上げた世界がああああああああああ。こい・・・ふうちゃんによって壊されたあああああああああ。と、キスされたことによってどうしまくり。ちなみに、俺たちの後ろをつけていたのは新聞部の人らしく偶然見かけて、つけてきたらしく。まぁ、き、キスしてる所を撮られまして、学年新聞に載せられまして、学校中に広まりまって、クラスから孤立より、逆に溶け込まされたね・・・。うん、とりあえず恋話好きの女子が俺に話しかけ、ふうちゃんが俺の話しかけられ・・・結果として、クラスに溶け込まされました。

1章ー2（後書き）

遅れてすいません。読んでる人いないだろうけど・・・まぁ、こんな感じでいいようなのでこれでいきたいと思います。ではでは・・・

ノシ

ちなみに、この話と次の話で一つです

1章ー3

あれから、数週間。いまだに、あい・・・ふうちゃんと目が合わせられない。どうしたものか・・・

「らいちゃーん、朝だよ～」

そして、毎朝俺の家に来る。・・・なんでだろうね。

「はぁ」

「ため息なんて、珍しいわね」

「そうかな？」

なんて、俺の話し方も丸くなったもんだなぁ。

「ほら、早くしないと遅刻するよ」

時計を見せられて、やっと気付いた。急がないと確実に遅刻する時間。

「え・・・っちょ！なんで、早く起こしてくれなかったんだよ！？」

「・・・寝顔が可愛くて・・・つい、ね」

「俺は男なんだけどっ！それと、可愛い、いうなっ！」

「えええ」

「なぜ、そこで反論するの！？」

「だって、正直なこと・・・」

と、まぁ、こんな感じでして。・・・・えーっと、学校の方は、ですね。

遅刻しました

ま、当然ですよね・・・・はぁ。朝っぱらから、体育。

「お前ら、また遅刻かっ！」

うざっ！とてつもなく、うっざ。だいぶ前からこのセリフを何十

回と聞いている。
「すいませんでした」
「愛宕っ！お前、前回も遅刻しただろっ！」
うっざ。つか、唾飛んでる。きったねぇー。このくそゴリラが。
「ちっ！・・・授業始めるから、早く行けっ！」
「今日は、どうして先生が？」
「あ？ああ、いつもの事だ。ほら、さっさといけっ！」
「・・・はい」
うわー、うっぜえ。
「さてと、今日の体育だがいつもの事でお前らの担当が休みだ。そういうわけで、この時間ずっと、グラウンドランニング。はい、はじめ、はじめ」
・・・この時間って、５０分もかよっ！？もちろん、このクラス全員、大ブーイング・・・だよね。
「らいちゃん」
「ん？」
「走れる？」
「あれの言葉を真剣（マジ）で受け止めるなよ・・・」
「え・・・」
「あんなことしなくていい。てか、むしろ、しちゃダメだろ」
まぁ、ちょっとしたことすれば走れれけどさ。せこい・・・と言うかばれちゃうんでそこんところ、無視の方向で、ね？でも、あれだ。そう、あれ。・・・・・・コイツ、ものすげぇ、殴りたいっ！そう思ってすぐに、風が吹いた。いや、俺を中心に風が・・・
「きゃっ！」
「ふうちゃん！」
こける手前でなんとか手をつかむことができた。
「あ、らいちゃん、ありがとう」
「いやいや。・・・・ういしょっと」
あーあ、〈力〉入れすぎたな。まさか、風が発生するなんて。思

いもよらなかった。
「で、らいちゃん」
「ん？」
「今、『ういしょ』って言ったよね？」
「え・・・うん」
「私って、そんなに体が重い？」
「え・・・いや、そんなことはないけど」
「・・・そう」
まぁ、一応傷つけないようには言ったよな。言ったよね？言ったんだよねっ！？
「ねぇ、らいちゃん」
「はい、何でしょうか？」
「はやく、走らないと怒られちゃうよ？」
そう言って、指を指したところには顔に怒りマークを浮かべてしまっている、教師がいた。
「あ・・・あー、そうだな。走るか」
はぁ、めっちゃ殴り飛ばしたい！ものすごく蹴り飛ばしたい！くううううう

ドンッ！！

地面を踏みつぶす勢いで足を振り下ろした。
「！？ど、どうしたの、らいちゃん」
「あ、いやなんでも」
そう思って、教師を見れば白目をむいて気絶していた。ふぅ、すっきりした。
この種明かしは、また今度。ところで、あと何分なんだろ？・・・
うわっ！まだ４０分もある・・・もうやだ。
「ちょっと、らいちゃん！？」
「ちょっと、そこで休んでくる」

ふうちゃんが、呼びとめてくるが無視する。にしても、空がきれいだなぁー。
なぜだろう、気がつけば授業が終わっていた。そして、目の前には前かがみで俺の顔をのぞいている誰かがいた。
目がかすんで見えにくいな。
「ねぇ、らいちゃん。起きて、ちょっと」
う～ん・・・なんだ？長い髪？ふうちゃん、じゃないな？ツインテールじゃないし。でも、『らいちゃん』って呼ぶし・・・
「・・・・あ、授業終わりました？」
「え？うん。でも、なんで敬語？」
ほえ？・・・・
「あ、髪ほどいてるからわからないか」
そう言って、髪留めを2つだして、髪をくくり始めた。その姿は・・・ふうちゃんだった。
「・・・髪ほどいただけでこんなに変わるのか・・・」
「なに、驚いてるの？」
「うんにゃ、なんでもない・そういや、先生は？」
「え？・・・チャイムと同時に職員室に戻ったけど？」
「は？」
・・・嘘、だろ？少しだけ俺の力加えた風とはいえ、そんなにすぐに目を覚ませないはずなのに。
「どうしたの？」
「い、いや、なんでも・・・ない」
もしかして、とり憑かれた？こんな朝早くからなんて・・・・・
ここの結界は大丈夫なのか？ま、いっか。にしても、きれいだなぁ、空。
「ん？」
「どうかしたの？」
「ん、空がきれいだなぁーって思っただけ」
「空？」

そう言って、空を見上げるふうちゃん。その姿もなんだか、かわいらしかった。でも、俺が空を見たのはきれいだからじゃない。いや、確かにきれいだから見上げたのも嘘ではないんだけども。なら、他の理由はなんだ？と、問われれば、空に描かれた文字があったからだ。

「ねぇ、らいちゃん」

「ん？」

「早くしないと着替える時間なくなっちゃうよ」

「あ・・・」

休み時間終了まで、約5分弱。やばいぁ・・・。

そんな大忙しの一日もそろそろ終わる。それも、すぐに・・・。

1章ー3（後書き）

読んでくれる人がいたら嬉しいな。と言うことで、どうでしょうか？今回のお話。読んでいただけたなら、感想を書いてください。お願いします。

1章－4

なんで、こうなったんだろ？体は重いし教室はおろか学校自体が崩れかけてる。
周りを見れば、俺の知った顔がそこらへんに死体のように転がっていた。
「・・・やっぱ、俺のせいなのかな？」
そんな状況下でも、冷静にいられる自分はいったい何なのか。不思議と考えてしまう。やっぱり、自分の『力』による理性かもしれない。
「そんなことありませんよ、主」
「・・・よっ、天」
心の中を読まれたと言うのにあまり驚かず、軽い挨拶をした。
「はぁ、主。起きれますか？」
手が差し出された。
「ありがと」
「さて、問題はもうここに侵入してる奴のことですよね？」
「ああ。それと」
息を深く吸い込みゆっくりと息を吐き出した。そして、自分の周りに風が流れを想像した。
「治癒の劣化ですか？」
「ん？ああ、これか？まぁ、そんな感じ。まだ完璧じゃないんだけどね」
さてと、風の流れを創造し細胞の動きを想像する。
「っ！・・・ふぅ。応急処置終了」
「大丈夫ですか？」
「なんとか？いざとなれば、アレを使うし」
「できれば、アレを使わせないように・・・」
人の注意を聞かないのが俺なのさ。

「おっと、来たみたいだよ」指を指した先は窓の外。「天、最初から飛ばす。いいね？」
感情のこもっていない言葉は怖い。それでも、
「主、わかりました。では」
その言葉を最後に天が消え、代わりに日本刀が床に突き刺さっていた。

「さてと、」刀を床から引き抜きながら敵を見る。「お前は誰だ？」
そこにいたのは、小学生くらいの小さい女の子だった。その姿に眉を寄せていると、

シュルッ！！

何かの音が聞こえた。
なんだ？服がこすれる音？
「天、警戒し」と、言いかけて後ろを振り返った。

「・・・・・尻尾？」

そこには、もさもさ、もふもふ感溢れる白い尻尾があった。
・・・触りてええええ。
「ちょ、主っ！？」
「なにぃ？」
あぁ～、もふもふはいいなぁ。あぁぁぁ。
「主っ！」
天の声を聞いたので「なんだよ？」と、でも言おうと思ったのだが・・・目の前の尻尾が切れていた。それに触れていた。いや、近かった俺は真っ赤な血を浴びた。
「あ、あ。て、天？」
「その尻尾を見てください。死にたいのですか？」

「は？」切り落とされた尻尾を見ると、もふもふ感がある毛は針のような鋭く、毛の先から何か液体が少しだけ出てる。「ど、毒？」確認を撮るように天に問いかけた。
「はい。これは毒ですね。尻尾を使うものですか・・・・・・」
今まで無視されていた、女の子は笑ってた
「初めまして、狐の妖怪」一拍置いて、「九狐です」
その言葉に一番に反応したのは、天だった。
「九狐？『きゅう』って数字の九ですか？」
「はい」
「『こ』は」
「はい、狐です」
「・・・もしかして九尾？」
「はいっ！」
・・・・敵意を感じられない。
「お前は俺たち人間を襲うのか？」
「ううん」
「では、なぜこんなことを」教室のみんなに指指して「こんなことをしたんだ？」
怒りを含んだ言葉。
「えーっとね、確か、人間なのに人間じゃない人を」一拍置いた。
「殺さないとねっ！」
笑顔で武装なことを言われた。
それにしても、小さい女の子なのに思わず足元に『ボウッ』と赤い炎を発動した。
「見ぃつけた」
「はぁ？」
「もうようないから、帰るね。じゃあねぇ、バケモノのお兄ちゃん・・・」

「・・・・」
「主、追いかけましょうか？」
「いや、いい。このことをじいちゃんたちに伝えといてくれ」
「わかりました」
手にかかっていた重さが消えた。
「それより、ここの修理どうすんだよ」
周りを見た。それは、修理とかどうとかではなく、
一瞬だけ視線が・・・・

1章ー5

とりあえず、学校の修復は一時的に終わらせた。「ふぅ」やっとの事終わった、『お片づけ』にため息をついた。でも、さっきの何かがおかしかった。・・・何だ？思い出せ、今すぐに思い出さないと大変なことになっちまう。話が噛み合ってなかった。それ以外はなにも変わって・・・そうだ、話が意味不明じゃないか。そっか、あれは行動を決められた、変わり身か。お、考え事してたらもう終わったのか。

「学校を修復できても人間の記憶」ふうちゃんを見て「改編できないしなぁ～」

「らい・・・・ちゃん？」

「げっ！」

嘘だろ・・・ここで起きるか、普通？というか、このままだとばれちまうぅぅうう！

「らいちゃん、なにしてるの？」

もう、起きたぁっ！！

「あ？」

「私、どうしてこんなところで、寝てるの？」

「し、りません・・・」

「？」

「・・・・」

目をそらした。

「目をそらさないで」

「は、はい」

言葉に力が入っていた。

もう、ここまで回復した?他の奴なんか、まだそこで伸びてるって言うのに・・・
「ねぇ、らいちゃん?私さ、ここで倒れる前に学校を壊されてるのを見たんだ」
「・・・うん、それで?」
「目が覚めたら、らいちゃんの横に誰かが来てたんだ」
はぁ、それ以上言わないように何とかするか。酸素不足で気絶させるか?でも、下手したら障害が出ちまうしなぁ。かといって、暴力も・・・
「らいちゃん、」
続きを言う前に手を差し伸べた。
「ふうちゃん・・・とりあえず、立って。ほら」
話をそらすか?一番安心な方法か。
「まぁ、生きてただけでよかったとし・・・」
「どうしたの?」
俺の顔を覗き込んできた。普通なら驚くところだけど、それよりも外の状況が一番驚いた。こんなんじゃ、話すらそらせない・・・
「な、なんなんだよ、これ」
「へ?」魔の抜けたような声で俺の目線の先を見た。「・・・・らいちゃん、これって・
・・・」
「町が・・・燃えてる」
目の前の景色は、真っ赤に染まった、町があった。

1章－5（後書き）

なんか、いつもより文の量が少ないけど気にしないで下さい。何か、変なところあったら教えていただけたら、うれしいです。
それでは、今後ともよろしくお願いします。

1章ー6

とりあえず、学校の修復は一時的に終わらせた。「ふぅ」やっとの事終わった、『お片づけ』にため息をついた。でも、さっきの何かがおかしかった。・・・何だ？思い出せ、今すぐに思い出さないと大変なことになっちまう。話が噛み合ってなかった。それ以外はなにも変わって・・・そうだ、話が意味不明じゃないか。そっか、あれは行動を決められた、変わり身か。お、考え事してたらもう終わったのか。

「学校を修復できても人間の記憶」ふうちゃんを見て「改編できないしなぁ～」

「らい・・・・ちゃん？」

「げっ！」

嘘だろ・・・ここで起きるか、普通？というか、このままだとばれちまうぅぅうう！

「らいちゃん、なにしてるの？」

もう、起きたぁっ！！

「あ？」

「私、どうしてこんなところで、寝てるの？」

「し、りません・・・」

「？」

「・・・・」

目をそらした。

「目をそらさないで」

「は、はい」

言葉に力が入っていた。

もう、ここまで回復した?他の奴なんか、まだそこで伸びてるって言うのに・・・
「ねぇ、らいちゃん?私さ、ここで倒れる前に学校を壊されてるのを見たんだ」
「・・・うん、それで?」
「目が覚めたら、らいちゃんの横に誰かが来てたんだ」
はぁ、それ以上言わないように何とかするか。酸素不足で気絶させるか?でも、下手したら障害が出ちまうしなぁ。かといって、暴力も・・・
「らいちゃん、」
続きを言う前に手を差し伸べた。
「ふうちゃん・・・とりあえず、立って。ほら」
話をそらすか?一番安心な方法か。
「まぁ、生きてただけでよかったとし・・・」
「どうしたの?」
俺の顔を覗き込んできた。普通なら驚くところだけど、それよりも目の前の状況に一番驚いた。こんなんじゃ、話すらそらせない・・・
「な、なんなんだよ、これ」
「へ?」魔の抜けたような声で俺の目線の先を見た。「・・・・らいちゃん、これって・
・・・」
「町が・・・燃えてる」
目の前の景色は、真っ赤に染まった、町があった。
「なんなんだよ、これ。さっきの奴もそうだ。これは、幻覚?夢?一体全体これはなんだ?」
「ちょっと、らいちゃん。なに、ぶつぶつ言ってるの?」
「・・・あ、いや。なんでもない」

どうする。このままだと・・・
「らいちゃんっ！」
隣で大声出されると、耳が・・・急に大声出してどうしたんだ？
「ど、どうしたの？」
「あぶないよっ！」
何かを引っ張っていた。と言うより、俺が見えていない。これは一体・・・
「・・・ちゃ・・・らい・・・・・・・らいちゃん！」
なんだ、これ？さっきまでの町とは全然違う。
「ん・・・」
起き上って、周りを見た。
え、夢？
そこには、さっきまでの自分が見たものとは違う景色だった。
「ちょっと、らいちゃん。何寝てるのよ」
「いや、眠たかったから」
頬についた涎をぬぐおうと頬に触れた途端。
ざらざら・・・してる。
「もう、頬に痕つけちゃって。はい、ハンカチ」
「ハンカチ？」
「涎よ」
「ああ（そっか、俺涎ぬぐおうとしてたんだっけ）・・・いいよ。顔洗ってくるから」
あ、寝痕残ってる・・・ん？寝痕？これが痛くて・・・あの夢（のような、やつ？）で見たのか。
「そう？そろそろ、チャイムなっちゃうけど」
「・・・遅刻でもいいや」
とりあえず、今あった出来事は夢なのか、それともこっちが夢なのか。それを確かめなくちゃだめだな。まずは、左目は・・・鏡がないとわからないか。
ぺたぺたと左目のあたりを触りながら、鏡のあるところへ、歩いて

行く。途中、チャイムが鳴ったが気にしない気にしない。

「あ、あの、ちゃ、チャイム鳴りましたよ？」

後ろから声をかけられた。

「・・・あの、どちらさまで？」

「え、あ、私は・・・隣のクラスの森村（もりむら）　幸（さち）です」なんだ、俺と同学年か。「あの、その、チャイム鳴ったのに、教室に戻らないのですか？」

「そう言うお前はどうなんだよ？あと・・・ん？『隣のクラスの？』ってことは、俺の事知ってるのか？」

「え、いや、その、そこの教室から出るところを見たから・・・」

「ああ、そうかい。俺は森村さんだっけ？」

「は、はい」

「蓮田　雷。それに、俺と同学年なんだから敬語とか使わなくていいんだけど」

「あ、その、・・・ごめんなさいっ！」

「いや、謝らなくていいから」

そんな会話をしているうちに、時間が過ぎていく。どうやら、森村さんは保健室へ行くところのようで

「そうか、体調が悪いんだったらさっさと行け。悪化して、俺のせいにされたら困る」

あれ？こんな感じでいいんだっけ？ふうちゃんやクラスの人と話してる時と全然違うけど。

いろいろあったが、丸くなった、と誰もが思ってしまう風景。

「そ、そうですね。そ、それでは」

ご丁寧に一礼して去って行った。

「あれ？俺、一体何しに行こうとしたんだっけ？」

1章ー6（後書き）

ふぅ、今年ももう終わり。
と言うわけで、次は来年更新予定です。それでは、みなさん「よいお年を！」ノシ

1章ー7

最近、体調が悪いのかわからんが寒気がする。それに、気配も感じなくなってきたし。こりゃ、まいったな。水を出し、顔を洗う。そう、俺は「顔を洗う」って言いながら適当にそこら辺を歩きまわっていたのだ。おかげで、今説教中。まさか、体育からこんなことが待っているなんて・・・はぁ、不幸だ。あーあ・・・幸せ、1個きーえーた。

「おい、蓮田ッ！聞いてるのかっ！」

「はいはい、聞いてますよ」

みんなの嫌われ者の体育教師が机をたたきながら言う。うっざっ！

「はぁ、もういい出ていいぞ。これから、こんなことするなよ」

ありゃ？意外とあっさり引いたな。・・・なーんて、色々と裏技を使えば怒る気も失せるさ。とくに嗅覚を刺激したら。と、チャンス貰ったことだし、帰るか。

「あーあ、もうこんな時間か・・・宿題する時間すら与えてくれんのか。夜が大変だと言ううのに・・・」

「主」と背後から声をかけられた。

「お、天。こんなところにどうした？」

「主、大丈夫ですか？こんなに、敵が近くにいるのに」

「は？」

呆けた声が出る。出ないとおかしいよね。

「そろそろ来ますよ？」

「わるい、話についていけないわ・・・」

頭を掻きながらそう言った。その時だった。「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

高い声が聞こえ・・・悲鳴！？

「お、おい、天。今の声って・・・」

「はぁ、早く動かないからです」

「・・・・やっちまった。しゃーない、行くぞ、天」
「はい」
これが、人であるときの声。そして、
「行きますよ、主」
これが、武器の声。同じ声でも違う、戦場にいるときと日常にいるときの声。戦場に行かないことにはわからないものだ。実際、俺は行きたくない。みんなと笑って過ごしたい。でも、家、家系、自分の立場、それぞれ考えてたら、これしか道はない。だから、戦う。平和な日常を手にするために。

1章ー7（後書き）

あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。

さて、そろそろ1章を終わらせないといけないと思ったので、急いで仕上げてしまったので完成度低くてすいません

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7946w/

２つの世界

2012年1月6日02時47分発行